

終活リストアップ

《社会的背景》

1) 核家族社会

昭和初期には、一組の夫婦が多い場合は10人近い子をもうけるという状況もみられ、またそうした子どもたちが世帯を持ち独立しても、兄弟姉妹のうち誰かは親と共に暮らすといったことが一般的でした。そうした時代には、親の老後の世話や故人の後始末を兄弟姉妹が分担して行うことができました。

しかし現代のように子供が1人または子供がいない夫婦や、未婚者が珍しくなく、また世帯の85%が核家族(総務省発表統計局「国勢調査」より)である状況にあっては、子供の世代に負担はかけられないというのが実態です。

2) 少子高齢社会

我が国の総人口は戦後増え続け高度経済成長を支えてきました。しかし2008年をピークに、それ以降減少に転じています。(2017年9月15日時点の推計：1億2671万人。前年の1億2692万人と比較すると21万人の減少)

一方、65歳以上の高齢者人口は、昭和25年以降一貫して増加し、終戦直後5%程度だったものが、2017年には27.7%にも上り、内90歳以上が200万人を超えるという状況になりました。数年後には、団塊の世代が大挙して介護を受け、そしていずれ鬼籍に入るといった状況になります。

3) 地域力の低下

「向こう3軒両隣」という言葉は、もはや死語になりつつある現代社会にあって、この言葉の意味するような“地域のつながり”“助け合い”のある人間関係は非常に希薄になっています。

コックをひねれば水やガスがでる。様々な情報はネットで十分。街の安全は警察や消防が守ってくれる。煩わしいことは「公共(役所)」にまかせておけばいい。

1990年代以降、そんな風潮が強まり、人と人とのつながりがどんどん薄れてきました。そうした状況の中、周りの人との関係作りがうまく出来ず孤立する人たちや、お互いが無関心ななかで発生する、例えば、子どもを狙う犯罪や事故、高齢者の孤独死の問題など、地域社会のつながりの希薄さからくる問題点もみえてきました。

以上のような社会状況の下、現代では高齢者の間では、周囲に迷惑をかけずに人生を終わるための準備する必要性が増し、社会現象として“終活”が広がっているといえます。

《終活って?》

1) 生前準備と生前整理

終活には大きくは、自分のお葬式やお墓をどのようにするかなどを、生前に自身で決めておく“生前準備”と、元気うちに財産を残された者が円満に処理できるよう計画を立てたり、身の回りの物品の整理と社会的な関係の整理などを行う“生前整理”があります。

2) 物理的物品の整理

元気で体が動く間に、本人にとって本当に大切なものを、できるだけ少量に絞っておく必要があります。

3) 社会的関係の整理

企業や団体に活動している場合には、健康なうちに後継者を育て、いつ動けなくなっても代役がいるようにしておくことも大切です。また、その人がいないと動かないような重要な役は降りて、身軽になっておく必要もあります。年賀状についても、「今年が最後」として生前に打ち切っておくことも必要かもしれません。

《物理的物品の整理》

今回はこの「物理的物品的整理」にスポットを当て、「すっきり片付けてエコな暮らし」のために、「終活リストアップ」をしてみましょう。

| グループ | 必要数 | 実数 | 不要なものを思い出して書いてみましょう |
|----------|-----|----|---------------------|
| 食器類 | | | |
| 家具類 | | | |
| 衣類 | | | |
| 領収書や書類関係 | | | |
| 写真や賞状類 | | | |
| 寝具類 | | | |
| 書籍類 | | | |
| 日用雑貨類 | | | |
| 貴金属品 | | | |
| その他 | | | |